

建 築

古代象形絵文字作家
竹本大亀氏による「建築」揮毫

第6回 京都建築賞 結果発表

- 主 催 (一社)京都府建築士会
■後 援 京都府・京都市・宇治市
■趣旨目的

京都府建築士会の創立60周年を記念して創設。京都の歴史的文脈を踏まえつつ創造性の高い建築作品を表彰し、その活動及び業績を広く社会に伝えることにより、京都及び建築の継承・発展に資することを目的とする。

第4回からは、次代を担っていく建築士の支援を目的として、京都建築賞に特定のテーマを設定する新たな部門として藤井厚二賞を創設しており、藤井厚二賞については次号で紹介。

- 審査委員会
委員長 岸 和郎(京都造形芸術大学大学院教授)
委員 米田 明(京都工芸繊維大学教授)
平田晃久(京都大学准教授)

■受賞一覧

- 優秀賞／ジンズ京都寺町通
設計者：中村竜治
(株)中村竜治建築設計事務所)
- 優秀賞／J.GRAN THE HONOR 下鴨糺の杜
設計者：河合哲夫・合田 靖・阪本泰智・丸子勇人 (株)竹中工務店)
- 奨励賞／HOSOO RESIDENCE
設計者：細尾直久
(HOSOO architecture)
- 入 選／宝ホールディングス歴史記念館
設計者：米津正臣・水野裕太・中村雅崇
(株)竹中工務店)

2018年 京都建築賞 審査総評

審査委員長 岸 和郎

京都府建築士会によって創設された賞である京都建築賞の本年度は6年目になります。その審査の経過についてご報告いたします。

私、岸和郎が委員長、京都工芸繊維大学大学院教授の米田明氏、京都大学大学院准教授の平田晃久氏のお二人の審査委員という審査委員会のメンバー構成で審査をいたしました。

資料の提出期限である2月28日時点で応募作品数は京都建築賞部門13点、藤井厚二賞部門6点、合計18点であり、昨年度の合計27点には及びませんでした。建築士会による様々な事前確認のプロセスを経た後、3月29日に一次審査委員会が開催され、引き続き4月27日には現地審査を行いました。

現地審査終了後、ただちに最終審査委員会を開催し、以下の結論を得ました。最優秀賞は該当作なし、「J・GRAN THE HONOR 下鴨糺の杜」、「ジンズ京都寺町通」の2作品を優秀賞、「HOSOO RESIDENCE」を奨励賞とすることに決定しました。

本年度の優秀賞とした「J・GRAN THE HONOR 下鴨糺の杜」については、下鴨神社の参道をマンションとして開発するという、社会的にもデザインとしても困難な課題への回答を求められており、さらに法的な高さ・形態などの様々な制限をも同時に満たさなければいけません。そんな状況でありながらも、結果として下鴨神社へと向かう参道の風景として、マンションのファサードという私的な様相を帯びながらも同時に公共空間として豊かな遊歩道空間を生成していることを評価しました。

同じく優秀賞の「ジンズ京都寺町通」については、商業空間のインテリアデザインという、どうしても仮設的な回答になりがちな状況であるにもかかわらず、内部にコンクリート打放しの構造体を挿入するという、それだけ聞くと破天荒にも思える方法でありながらも、ディテールへの心遣いやミラーなど副次的な素材の選択によって、結果として繊細な内部空間が実現されていることを評価しました。

また、奨励賞の「HOSOO RESIDENCE」についてはそこに使われている素材とその扱い方について、審査委員会でも様々に議論が沸騰した作品でもあります。小さな町家の改装であるにも関わらず素材に焦点を当てすぎた結果、プランニングや断面方向の可能性にいま少し配慮があってもいいとの意見もありますが、キャリアが始まったばかりの若い建築家の将来へ可能性を信じて、奨励賞をおくることにしました。

以上で京都建築賞の審査過程とその結果の報告といたしますが、現在の審査委員会での審査も今年が最後であり、私自身のこれまでの6年間の審査でも見落とした作品があったのでは、と反省しきりです。これまで応募してくださった方々に感謝し、また来年度からの京都建築賞の更なる発展を祈念しながら、本年度の審査報告を終了したいと思います。

設計者：中村竜治／(株)中村竜治建築設計事務所



コンクリートの中が眼鏡の展示空間、外が受付、検眼、待合等になっているが、数年後のリニューアルの際は、それが反転しているかもしれない



平屋は既存ビルから構造的に独立して建ち、既存ビルの構造よりも力強く壊しがたい構造物として存在する

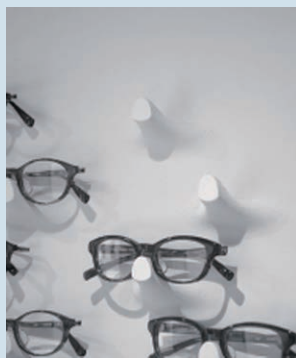


既存ビルの内外、平屋の内外が入り交じる



新築ビルの1階に
コンクリートの平屋が2つ並ぶ

所在地／京都市中京区
用途／眼鏡店(テナント)
竣工／2016年8月
建築面積／58.73㎡
延床面積／158.26㎡
構造規模／鉄筋コンクリート
壁式構造平屋建て



壁面パネルは突起が削り出されたようにある

【講評】

眼鏡店の内装設計である。とは言え、一筋縄ではいかないソフィステイケートされた異化作用をもった作品であり、ロジックというよりも微細な、今までにない感覚を身体にもたすところにその主眼があるように思われる。事前の写真で見られたりでは、モデルレーンな表現の設計に思われたのだが、実際に訪れると様々な尋常ではない、すなわち慣習的ではない事物のセッティングが講じられており、それらが織りなすアスベクトに身を委ねていくと、ある意味かすかに裏切られていく感覚が心地よい。・・・なので、それらの経験をいちいち論理立てて説明し、解説するのは野暮というもので、設計者もそれを望んでいたわけではないだろうし、また評者もそうした新しい感覚が素晴らしいといった感想以上に踏み込んで言語化するのはいささか苦痛である。

とは言え、それでは受賞評にはならず、読者にとっても作品の感覚性を実感できないで

あるうから、具体的かつ概念的な説明をあえて試みよう。場所は、アーケード街に面した新築ビルの1階部分、いわゆる路面店である。しかし建物の1階階高は幾分か高い。そこで設計者は2個のコンクリートボックスをその空間に設置する。この最初の布置によって、幾つかの感覚的な転倒が目論まれる。作者自体、「2棟の平屋」と説明しているようにそれらは、什器家具ではないのである。むしろ周到に複数個挿入することによって、建物のインテリアにスケールの落ちた街を構想しているのである。家具のような街。

さらに、それらはコンクリート造で、なおかつエクスポーズである。おいそれとは壊せない。本体の建物自体が鉄骨造であることを考えると構造上のオーダーに転倒が起こっている。作者は、それらを京都の「町屋の柱や梁」になぞらえているが、むしろ橋脚や堤防といった土木インフラに近いだろう。家具のようなインフラストラクチャー。

加えて、アーケード街に面しているという特性を生かして、内部と外部の2重反転が仕掛けられている。パッサージュがフラヌールの夢想を亢進したように内部性の高いアーケード街からホワイトアウトした店内に入るとそこは、家具のような街の街路である。あたかも夢の中で、場面が瞬時に切り替わったようである。そしてコンクリートの平屋に入ると物理的には内部性が高まるものの、高架下のようなマテリアリティにより身体には外部性が強く感知される。すなわちアーケードからの外↓内↑外の感覚は、容易に内↓外↑内へと転倒する設定なのだ。

最後に商品である眼鏡のディスプレイについて言及しておこう。この家具のような街が眼鏡をアフォードする様態は、訪れた客に果たかも自身が眼鏡をかけた状態を喚起するようになっている。視覚的の双対性を意識した開口部と鏡、あるいは眼鏡と皮膚との触覚性を示唆するなめらかな支持形状。

以上、縷々記述したような、幾多の異化Ⅱ転倒作用の精緻さを評価して受賞作品とした。

(米田 明)

設計者：河合哲夫・合田 靖・阪本泰智・丸子勇人／(株)竹中工務店



瀬見の石庭：既存、移植、新植樹木による森のような中庭のランドスケープ



葵祭時の参道の様子：参道沿いの住戸からは葵祭の行列を眺めることができる



所在地／京都市左京区

用途／共同住宅

竣工／2016年8月

敷地面積／9347.68㎡

建築面積／3704.13㎡

延床面積／9433.37㎡

構造規模／鉄筋コンクリート造3階建て

空撮写真



参道：
糺の森をのぞむ

【講評】

通称下鴨神社として親しまれている「賀茂御祖神社」の「糺ノ森」南側敷地、北へ神社本殿へと向かう表参道に接続し、その一方で南に一般住宅街へ抜ける道を挟んで計画された集合住宅である。RC造、3階建て、住戸数108戸を擁する。底地は神社が保有し、周辺環境の維持管理経費捻出のための、定期借地契約の分譲集合住宅である。

世界遺産として名高い下鴨神社に隣接するという、重要な位置に分譲集合住宅が建設されるという話が公表されると、建築関係者のみならず一般の人々の耳目をも引いた。事前に100戸以上の規模と聞いて、貴重な森に近接した良好な環境を破壊する集合住宅といった先入観が勝ったが、実際に訪れてみると集合住宅そのものが自然環境と齟齬をきたしているといった感覚がほとんどない。設計者は、たぶん建築そのものによる表現は、このコン

テクストには有効ではないと判断したのである。むしろ建築は緑の背景となるように黒子の役割に徹している。建物周囲にできるだけ多くの緑を配してバッファゾーンとし、建物そのものを埋没させ、消していく。当然敷地の余白、引きが必要だが、賢明な設計アプローチだと感じた。かなりの本数の大木がすでに樹木の背後に建物を追いやっている。またこうした植樹は、参道側だけではなく周囲の既存住宅との間で積極的を試みられ、南西部にある「瀬見の石庭」といった名前の小ぶりの庭は、樹木の配置と隣棟間隔が程よい、好ましいスケール感をもったナイス・スペースである。

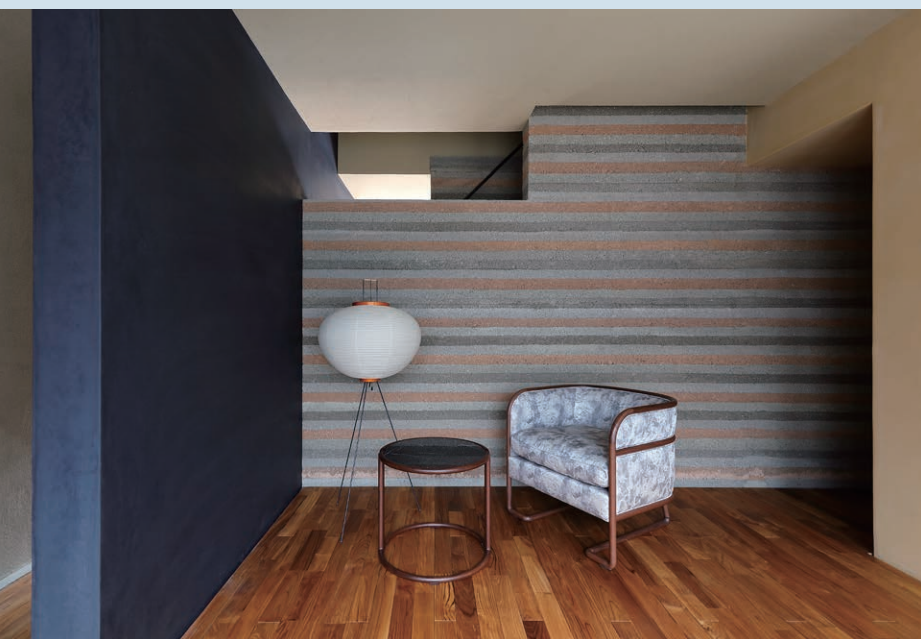
こうした植樹による環境形成は、そんなに特殊なアプローチではないが、建物に負けないほどの規模で、それも敷地外周余白の全般に樹木を導入するとなれば、計画時からかなり周到な検討が重ねられたことが推測される。さらに年を経ることによって、植樹の緑が繁茂し、「糺の森」が実質的に拡張していったような様相を呈するだろう。

そもそも当該敷地には、老朽化した研修施設と青空駐車場があり、「糺の森」の入口付近としては、いささかうらびれた風情を醸し出していた。かつては無防備にも参道に接して駐車場が露出していたのに対して、中庭形式の駐車場として囲い込むことによって、ほとんど外部道路側からは、車の存在を感じさせないようになっている。資料では、葵祭の際、風雅な装いをまとった隊列が参道を練り歩くのを至近距離から、森の中にいる感覚で、しかもプライベートな空間に居ながらにして眺めるといったプレゼンテーションがなされていたが、そうした風物の鑑賞が可能になる集合住宅は稀有な存在であろう。

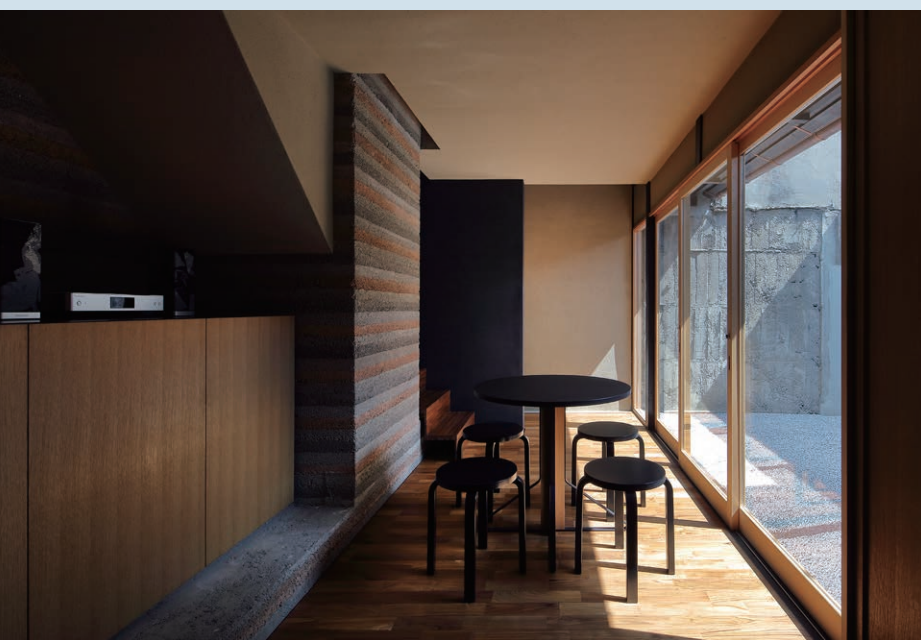
参道側の軒先位置が高いことと参道と直行する御蔭通り側の妻面ファサード意匠があまりにも無頓着で若干気になったが、総じてこの難しいシチュエーションに対して、この規模の集合住宅を過不足なく、バランスよく実現した設計案として評価された。

(米田 明)

設計者：細尾直久／HOSOO architecture

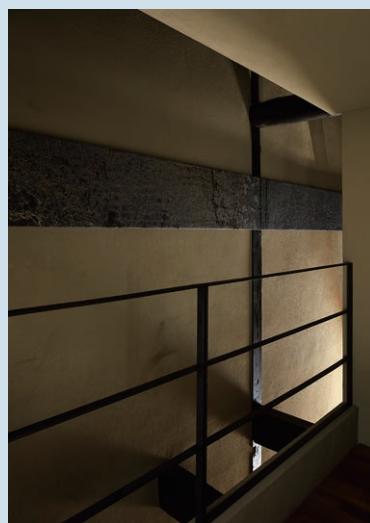


リビング：センターコア部分の版築を見る



サロン

所在地／京都市中京区
 用途／宿泊施設、ショールーム
 竣工／2017年4月
 敷地面積／66.71㎡
 建築面積／39.78㎡
 延床面積／69.37㎡
 構造規模／木造2階建て



西陣織の「界壁」と吹き抜け

【講評】

素材やデザインに対する並々ならぬ思いと、若いエネルギーがぎゅっと詰まった、濃密な作品である。それほど広くはない空間の中に、これほどまでに様々なアイデアが詰め込まれるのかと感心させられる。しかし同時に、それら各部に溢れる意匠的工夫全体を結びつける考え方は何なのか、どこか宙ぶらりんのまま、放置されたような気持ちにもなる。あるいは作者は、そのような全体性とか形式的統一性のようなものを避けようとしているのかも知れない。確かに、安易な全体性など目もくれずに、ただ実直に、しかし執拗に、個々の物質性とその結果生まれる繊細な光の粒子の振る舞いに注意深く耳を傾ける作者の姿勢には、心打たれるものがある。情報化社会の中で、単純で分かりやすいもののありよ

うが評価されがちであるにも関わらず、あくまでひたむきにものに向き合う姿勢は、共感を誘う。

とはいえ、例えば西陣織の美しいタペストリーをもう少し全体的に展開することはできなかったのか、とか、空間や部分のプロポーションにももう少し統一的な考え方を打ち込めないか、などと素朴に思わないでもない。つまり、作者が恐らくは避けようとしているごく当たり前の建築的方法論を、バラバラな部分の論理に対して対立的に持ち込んでしまった、作者から見れば「古風」な建築家であろう僕などには思いつく。ともあれ、ありがちな解決法に頼らず自らの道を進む作者の勇氣ある態度が今後さらに大きな実を結ぶことを願っている。

(平田晃久)

古代象形絵文字作家 ^{たけもとだい き} 竹本大亀氏 プロフィール

1952年、滋賀県大津市生まれ。高等学校にて芸術科目として書道を選択、ライフワークとして書アーティストへの道を歩む礎を高校生時代に築き、書一筋の人生を歩み、独自の世界を築いている。

漢字のルーツが絵文字であることに注目。現代の文字は絵・絵文字が記号化・符号化いわば文字化したもの、またそれは絵が抽象化したものとも言え、現代の文字を具象化することで絵文字ならではの表情や生命感を再現し、書道界に新境地を開き独自の世界を展開している。

甲骨文字や青銅器文字を用いて、世界平和や人類の幸福を神に祈願するという揮毫（きこう）活動を行っており、初回は1997年の阪神・淡路大震災後の復興を祈願して生田神社で行い、以後、青蓮院門跡・清水寺・八坂神社等で奉納祈願揮毫を行う。2012年以降は京都・松尾大社の正月行事として神に通じる古代神聖文字にて、この一年をこの文字のもと、ポジティブに歩むという1字を募集、奉納祈願揮毫を行っている。

第6回 京都建築賞

藤井厚二賞 結果発表

■趣旨目的

藤井厚二賞は、第4回京都建築賞の募集に際して、新たな部門として創設し、今回で3回目となりました。この賞は幾多の実験住宅の計画を通じて、卓越した洞察力、探究心、行動力をもとに新しい建築のあり方を追求した藤井厚二氏に敬意を表し、先人の叢智に学び、新たな挑戦をしている建築士の飛躍の一助となることを意図しています。

本年も昨年と同様「木」をテーマとして、木造作品に拘らず、内外装仕上げに利用した計画や流通・再生に関わる提案などを広く募集しました。

■審査委員

梶谷繁礼（(株)梶谷繁礼建築研究所 主宰）
前田圭介（広島工業大学 教授）
満田衛資（京都工芸繊維大学 教授）

■受賞一覧

（応募：6作品）

藤井厚二賞／伏見稲荷の納戸

設計者：垣内光司

下山 聡

現地審査選出作品／絆屋ビルディング

設計者：竹口健太郎

山本麻子

現地審査選出作品／光兎舎／KOUSAGISHA

設計者：津田朋延

現地審査選出作品／琴音つばさ保育園

設計者：神津昌哉

※現地審査選出作品は順不同

■審査経緯

審査に先立ち、そつなく全体的に完成度の高い建築ではなく、木をテーマに何がしに挑戦的であるものを評価したいという考えが3人の審査委員で共有された。

3月15日、書類により6件の応募作品から4件の現地審査対象を選ぶ。4件何れも実際にその空間を体験したいと思わずにはいられない建築であった。5月9日、現地審査の後、作品ごとにあらためて講評を行ったうえで、審査委員の全員一致で『伏見稲荷の納戸』を今年度の藤井厚二賞に選出した。



所在地／京都市伏見区
用途／倉庫業を営まない倉庫
竣工／2017年11月
敷地面積／226.76㎡
建築面積／65.52㎡
延床面積／39.74㎡
構造規模／木造1階建



現地審査選出作品

絆屋ビルディング

設計者：竹口健太郎・山本麻子／(株)アルファヴィル



所在地／京都市中京区 用途／住居兼アトリエ・ギャラリー 竣工／2017年5月
敷地面積／121.95㎡ 建築面積／83.43㎡
延床面積／198.83㎡ 構造規模／木造 地上2階・地下1階建

光兎舎／KOUSAGISHA

設計者：津田朋延／(株) sunia 一級建築士事務所

所在地／京都市左京区
用途／店舗・アトリエ・住宅
竣工／2015年10月
敷地面積／101.74㎡
建築面積／81.9㎡
延床面積／266.53㎡
構造規模／鉄骨造 地上4階建

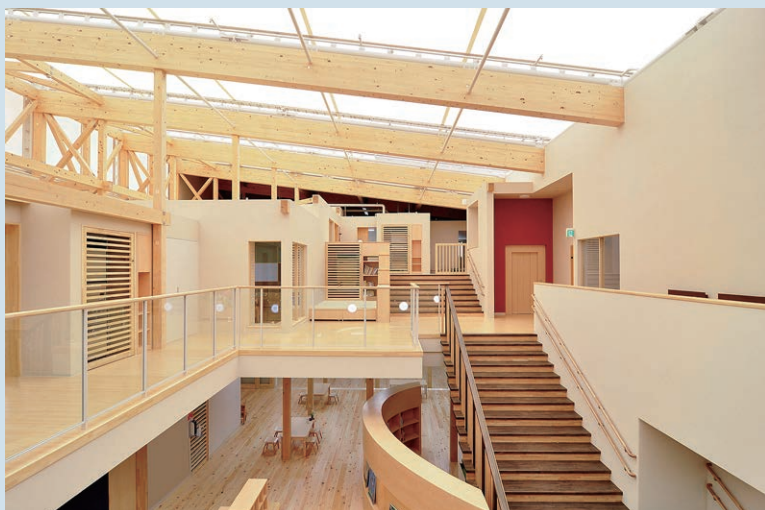


琴音つばさ保育園

設計者：神津昌哉／(株)日建設計



所在地／京都市南区 用途／保育所 竣工／2016年3月
敷地面積／1,035.30㎡ 建築面積／722.63㎡
延床面積／1,104.54㎡ 構造規模／木造 地上2階建



【講評】

『伏見稲荷の納戸』は京都の中心市街から少し離れた稲荷山麓の住宅地に静かな存在感をもって佇んでいた。印象的なその構法は、地面に設置された直方体のコンクリート塊を挟み込むように、それぞれ自立した鳥居型の木フレームが建て並べられているものであった。日本では古来より地面に木柱を突き刺し、或いは石やコンクリートの上に柱を建て建築を構築してきた。この挟み込むような構法はまったく新しく、しかし施工性も含めて合理的なものであり、ゆえに汎用性をもちうるものであろう。同時にこの構法はあたかもずっと以前より普通に採用されてきたようにさえ感じる。そしてこの鳥居型の木フレームが等間隔でただただ連続するだけの内部空間は清々しく、ある種の神聖さをも感じるものであった。

この敷地に設計するに際し、設計者は伏見稲荷への軸性とその鳥居のモチーフを建築に取り込む。取り込むといっても、この長細い建築そのものが伏見稲荷の方角を志向しており、鳥居のモチーフはこの建築の構造そのものである。したがって建築がそのまま伏見稲荷と関係づけられる。ここで鳥

【講評】

講評の前に第3回藤井厚二賞の審査に先立ち、審査委員同士での意見交換会を行い様々な角度から建築家藤井厚二についてや賞の意義、本審査の評価基準なるものについて鼎談している。まず京都府建築士会のHPの記事を参照頂きたい。それらを踏まえながら厳正なる現地審査を経て第3回藤井厚二賞は審査委員満場一致で「伏見稲荷の納戸」に決定した。

作品のタイトルと建築の外観からも分かるように、この敷地周辺にある伏見稲荷大社の千本鳥居と対峙するような形態で、大通りから少し入った路地の空地にポツンと建築が座っていた。鳥居のフレームが朱色でないものの建物周囲が木々に包まれていようものなら、道行く人がつい手をあわせたいような一見お社にも見えるとてもチャームिंगな佇まいである。もちろん、用途は施主の要望による倉庫。その書類物を収納する段ボール箱や資材規格寸法から導き出されたモジュールによる鳥居フレームの反復が心地いいリズムをつくりだしていた。この伏見稲荷大社のコンテクストを反映

居型の木フレームを赤く塗装する必要はないのである。

木造建築においてその将来を考えると、その場に痕跡としての穴や基礎をいかに留めるか、或いは部材のリユースを図ることでいかに延命させるかで応えようとするのは定石であるが、この建築においてはその両方による将来像が用意されている点も周到である。さらに、設計者は触れていなかったが、この細長い建築には、並列または直列するかたちでのさらなる増築という将来も想起されうる。

この建築はローコストである。そのこと自体がこの建築の評価を上下させるものではないが、その金額に設計者の建築を実現することに対する確たる意志を感じずにはいられない。この建築には知性と挑戦とがそのままにあり、余計なものはない。ゆえに自然と品性をも纏うこの建築は藤井厚二賞に十二分に相応しいと考える。

『絆屋ビルヂング』は京都の中心市街において伝統的な路地の奥にある。オモテの街路の喧騒から路地を奥へ奥へと進

した何気ない佇まいの中に、設計者が思考した緻密かつ執拗なまでの工夫が随所にちりばめられている。それは場所性の表象からはじまり、建築コストや将来の移設・輸送効率も想定した構造形式、および徹底して施工性を考え抜いた木材加工・組み立てから折版屋根と波板外壁などの汎用素材の扱い方、そして換気・採光計画など枚挙にいとまがなく隙がない。特筆すべきは鳥居フレームの間口が一間半で構成されているなか、東西面外部に出ているひとつ目の鳥居フレームの間口寸法が少し狭められている点である。設計者が曰く鳥居のプロポーションを意識してのことだという。ここまで徹底したモジュールで構成していけば当然同寸法でフレームをつくり納めたとくるところだが、プロポーションの美しさに対して飄々とやってのけるあたりがとても藤井厚二に通じるものを感じた。

設計から竣工、そしてこの先の未来の移設まで見据えた素晴らしい建築を実現するにあたり、建築家垣内光司と構造家

んでいく空間体験は、この建築の内部空間にもって昇華される。木造建築において一般的な部材断面や空間スケールを採用しつつ、水平垂直ではない線材や面材により空間が構成されている。壁面線の揃った街並みを形成するオモテの街路をX軸とすると、町家などに内包されるオモテの街路からウラの街区中央へと向かう奥性がY軸といえよう。この建築での空間体験は、これら京都に伝統的な都市空間構成に対し新たな軸が付与されたものを感じる。それは上部へと向かうZ軸的であると同時に斜めの効果により新たな次元をも獲得しているようである。

一方で、建築の裂け目を路地の延長に位置させることで、路地を建築に取り込み、道と建築との境界に位置する敷地という概念が取り除かれているであろうという期待は、実際にこの建築を訪れてみると少しばかり消化不良に感じた。

(集合繁礼)

下山聡の協同作業はまるで、藤井厚二と大工棟梁の酒徳金之助との関係のようにも感じられ、まさに本質にふさわしい作品であるといえる。

その他の現地審査作品である「琴音つばさ保育園」に関しては昨今騒がれている騒音・セキュリティ問題など踏まえても、もう少し外部との直接的環境の連続性をもった気持ち良さがほしいと感じた。「光兎舎」はスパイラルに上階へ繋がっていく外部に対して内部との連続性が少し希薄に感じたことと西側へ広がる瓦屋根の風景に対する場所性が感じられなかった。「絆屋ビルヂング」は応募写真の建築空間と実際訪れた時の施主の力強い生活感にいい意味で意表を突かれたが、要望に対して設計者がどの程度意識的にこの空間を考えたかが気になっただけに直接設計者に伺えなかったのが残念であった。

(前田圭介)

【講評】

受賞式での講評においてこの伏見稲荷の納戸の設計について「いちいち上手い」と表現した。伏見稲荷の千本鳥居に呼応した鳥居型フレームの連続というストーリーのベタさに目が行きがちだが、それは建築の方向性を与えるきっかけに過ぎない。建築物は建材を用いて構築した結果である。従って、建材の用法と構築の方法を考えること、は建築設計の基本である。そのまま建築表現となる鳥居型フレームは910という生産側の論理で並びコストに貢献しているが、鳥居の柱は持ち上げられた床コンクリート側面に抱かせることで柱脚固定度を与えられ、貫を併用することで105角の天然乾燥松材のみでシンプルに壁のないラーメン構造を実現している。接合ボルトは精度の出しやすいコンクリート側面に出し、フレーム毎に東西逆方向から柱をスライド挿入可能にすることで地組後の建て方を実現させている。フレーム毎に挿す方向を逆にする事で柱の倒れに対し交互に利く状態としつつ、

倒れに伴う割裂を防止するディテールとなっている。それら加工は標準的なプレカット工場ですべて対応できる簡易なものだ。最大部材が105角であるため1フレームは軽量で地組を行いながら人力のみで1日で建方できていることも特筆すべき点であろう。材の特性を理解し、考え込まれた構造システムが全く嫌味なく作品の中に溶け込んでいるのは意匠設計者と構造設計者の高度なコラボレーションの成果であり、連名での受賞に相応しい藤井厚二賞作品と言える。

絆屋ビルディングは、通常にはないスケールの木造住宅をクライアントの生活に適合させた魅力ある建物であったが、そのスケールの逸脱による負の側面が少なからず気になった。階高の増大は風荷重を増大させ、結果的に軸組みの負荷を増やす。コスト的な制約からか通常スケールの建物用の安価な金物を選択しているものの、通常とは異なる用いられ方をす

ることとなり、結果的に建方日数など現場に苦勞を強いてしまった点は、少なからず受賞作との差として顕在化した。

琴音つばさ保育園は、軽量の膜屋根を用いて木造にしては大きめのスパンに対応させるなど楽しみに現地審査に臨んだが、設計者が意匠・構造ともに小々中規模の木造はあまり行わない大きな組織事務所に属しているせいか、目につく箇所での金物の選定等、表現につながる箇所で感心できないディテールが多く見られ、木造全般についての経験の浅さが浮き彫りとなった。

光兎舎を含め、どの作品も建築主の要望を満足させ、現地審査を行うに相応しいものであったが、設計という行為における「ちょっとした上手な」積み重ねの集積が、結果的に大きな差となって表れたように思う。

(満田衛資)